**曹洞宗大本山總持寺・ニコニコ法話　　　　　　　　　　　　　　　　　　 令和5年11月**

**この一句**

**山形県　福田院住職　長峰広道師**

　行楽の秋、食欲の秋、読書の秋、いろいろな秋がありますが、秋の夜長、なんといっても、一人静かに読書する時間はうれしいものです。書店に行けば、学術書や文芸書、雑誌等いろいろなジャンルの本が山のように積まれています。どれを読もうかと考えると目移りしてしまうほどです。時間をかけて読みたい本を探すこと、これもまたたのしいものです。

　良寛さまのことばに「たとえの書を読むとも、一句を持するにかず」というのがあります。「恒沙」とはインドのガンジス河の川砂のことであり、つまり、途方もなく大きなガンジス河の川砂であるから、数えきれないものを表現しています。「たとえ恒沙の書を読むとも」というのは「たとえ数万冊の書物を読むとも」ということであり、「一句を持するに如かず」と続けて読むと、「数万冊の書物を読むのもよいが、一冊の本の中の一句を深くかみしめて実践することがさらに大切なことである」と教えています。

　アメリカにこんなお話があります。ある時、若い学生が大学の先生に「先生、○○という本をお読みになりましたか？」と聞きました。先生が「まだ読んでいません」と答えますと、「そう、早く読んでください。出版してから三か月にもなりますヨ」と自慢げに言いました。こんどは先生が「あなたはダンテの『神曲』」をお読みになりましたか」と聞き返しました。そして、まだ読んでないと頭を横にふる学生の顔を見ながら「早くお読みなさい。出版してから何百年にもなりますヨ」と言ったということです。このお話は本の選び方のむずかしさを示した面白い話であります。

今日、情報の時代というのでしょうか、時代に遅れまいとして、つぎつぎと出版される新刊書を読みあさるのもよいのかもしれませんが、古典や学術書等を読むことで、人間形成の肥やしとなるような真に価値のある、心を打つような一句をかみしめて、それを自分の人生に生かして行くことも大切なことではないでしょうか。

“知らないことがたくさんあったとしても、自分はこの一句（言葉）に違うことなく生きて行く”と言えるような一句に出会える読書をしてみたいものです